「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字 NEWS

7

JULY 2020 NO.962

Japanese Red Cross Society NEWS
http://www.jrc.or.jp

令和2年7月1日（毎月1日発行）
赤十字新聞　第962号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

わたしも赤十字　寄付での支援者

櫻井裕之（さくらい・ひろゆき）さん【p.4でご紹介】

特集

新型コロナウイルス感染症の国内発生早期から、感染拡大期、蔓延（まんえん）期を通じて

感染症専門医が見た「COVID-19」

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

令和2年7月1日（毎月1日発行） 第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

新型コロナウイルス感染症の国内発生早期から、感染拡大期、蔓延（まんえん）期を通じて

感染症専門医が見た「COVID-19」

●古宮伸洋（こみやのぶひろ）
北海道大学医学部卒業後、長崎大学熱帯医学研究所で熱帯医学を、国立感染症研究所FETPで感染症疫学を学ぶ。兵庫県民主医療機関連合会や東京都立墨東病院などを経て、2012年から日本赤十字社和歌山医療センターに勤務。同センター感染症内科部長、感染管理室長も兼任する。

“過酷な現場も厭（いと）わない。国際医療救援に参加し、世界の苦しむ人々を救いたい”
そんな思いを抱いて世界中にネットワークを持つ赤十字病院の門を叩く医師・看護師は少なくない。
日赤和歌山医療センターの古宮伸洋医師も、そのうちの一人。
感染症専門医として、国際医療救援を数多く経験してきた古宮医師に、
新型コロナウイルス（COVID-19）と、この半年の動向を語ってもらった。

巧妙なウイルスだ。こんなウイルスは他に思いつかない。重症な肺炎を起こす病原体という側面を持ちながら、ただの風邪のような症状だったり、人によっては無症状で、警戒へのハードルが下がる。このウイルスは、感染の広がりやすさに長（た）けている。エボラ出血熱は、感染初期はインフルエンザのような症状だが、数日後に重篤な症状が出るので感染を見落とす確率は低い。SARS、MERS は症状がひどくなってから他者へ感染するので対策が取りやすい。一方、新型コロナウイルスは軽微な風邪症状や、無症状の状態でも感染する。陽性者本人が気づかないうちに周囲を感染させるということも起こる。これが感染防止の対策を難しくさせている。今、医療機関は無症状の感染者から感染が広がるリスクと、日々、対峙（たいじ）している。

古宮医師が派遣された、国際医療救援の事例

エボラ出血熱／2014

エボラ出血熱が流行したリベリアに WHO から派遣された古宮医師（右）。現地で友人になった医師はその後エボラで亡くなった。

コレラ／2017･2019

2017 年にコレラが大流行したソマリアでの経験を買われ、2019 年、同じアフリカ東海岸のモザンビークで発生したコレラの流行地に派遣され、診療などを行った。

避難民キャンプ／2018

「今夜1万人が川を渡るから備えて」。バングラデシュ南部避難民キャンプに押し寄せる人々を診療。ジフテリアが流行し、現地医師へアドバイスを行う。（右が古宮医師）

第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 令和2年7月1日（毎月1日発行）

感染者が多発している大型クルーズ船への派遣。そして武漢からチャーター機で帰国した人びとに対しても…

新型コロナウイルスに注目するようになったのは今年の正月。年末あたりから中国で原因不明の肺炎が発生していると知り、「原因不明といっても、後から病名が判明するのはよくあること」くらいに考えていた。状況が変わってきたのは1月半ば。患者がどんどん増えていると。これは世界的な脅威になる。自分の中でスイッチが入った。

1月16日に日本国内で最初の感染者の発表があった。日本と中国でこれだけ人と物の行き来があるのだから、当然来るだろう、と驚くことはなかった。日赤和歌山医療センターでは平岡院長も同じ考えだったので、動きは速かった。院長主導で院内に対策本部が設置され、**感染防護具の補充**、**院内マニュアルの策定**、各診療科・部門の**体制見直しと強化**、これらのことを**1月下旬には完了**し、1月30日には県内の医療従事者・医療行政担当者に呼び掛け「新型コロナウイルス感染症勉強会」を開催、500人以上が参加した。いつ来るかわからない感染拡大に備えた当院の対応は、全国的に見ても異例のスピードで実施されたと言える。

2月12日から、**横浜港に入港した大型クルーズ船**、そして18日に**武漢からの帰国者の一時滞在施設**へ、**日赤医療救護班**（以下、救護班）の感染症アドバイザーとして参加。救護班として災害現場に派遣された経験は豊富でも、感染症が流行している大型クルーズ船という閉鎖空間に派遣されるのは、どの救護班も初めての体験だ。感染防護の準備はどうするか、から始まり、任務を終えた後どのように病院に戻るかまで、考え得る限りの感染管理のアドバイスを行った。結果、日赤職員の派遣者数延べ255人から一人も感染者が出なかったのは、救護班要員一人一人が感染対策で守るべきことをしっかりやったから。感染症のさまざまな現場を経験している自分でさえ怖いと感じた船内での活動終了後、残念なことに、各地で心無い言葉を投げ掛けられた人もいたようだが、胸を張ってほしい。

無症状の感染者によって院内にウイルスが入り込むのは防げない。また、入り込むやいなや100％拾い上げることも不可能だ。最初の一人から院内感染になることはどこの病院にも起こり得ることで、当院でそれが起きなかったのは、早くからの対策と「ラッキー」が重なったのだ。

いま医療機関では、いかに早く兆候をつかみ、広がりを抑える対策をとるかが重要になっている。また、医療従事者は業務中の3密を避け、業務外も外出・移動の自粛を含む行動変容も求められた。このような状況下で、海外での医療救援の経験を持つ者が多い赤十字の医療機関は、国内では珍しい存在だと思う。感染症に対してどのように備えていくか、どのようなポイントに気をつけて対応するのか、海外の医療資源の限られた状況の中で対応した経験と知識が役に立っている。

無人になった感染症専用病室に立つ古宮医師

日赤医療救護班の活動❶【大型クルーズ船 派遣】

赤十字病院 28 施設から派遣
派遣職員数 延べ 142 人

日赤医療救護班の活動❷【中国武漢市からの帰国者の一時滞在施設 派遣】

赤十字病院 18 施設から派遣
派遣職員数 延べ 113 人

これから**インフルエンザウイルスの流行と新型コロナウイルスの第二波が重なる**のでは、などの懸念もあるだろう。インフルエンザウイルスは子どもから感染が拡大する。新型コロナウイルスは大人から感染が拡大し、高齢者に大きく影響する。このように注意を向けるべき集団は異なるが、感染の広がりを防ぐには、**基本は同じ対策が有効**だ。**3密にならず、ソーシャルディスタンスを保ち、しっかり手洗い**をすること。

新型コロナウイルスの感染をゼロにすることは難しい。でも広がりの効率を低下させる、最小限に抑えることはできる。感染者を最小限にする社会全体の取り組みで、この危機を乗り越えていければ、と考える。

●動画で見る赤十字（日赤ホームページ）

新型コロナウイルスに関連する日赤の活動を動画でご覧いただけます。

詳しくはこちら→

令和2年7月1日（毎月1日発行） 第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

TOPICS

新型コロナウイルスに立ち向かう日赤病院へ届いた、数多くのエール。その声は、確かに医療従事者たちを勇気づけました。

力をくれた、あなたの声援に「ありがとう!」

「体の奥から震えが走りました。頑張ろう、この声に応えようって」

なぎさ小学校の窓に貼られた神戸赤十字病院への応援メッセージ

横断幕を背にする岸本医師（左）と根来医師。横断幕に、なぎさ小学校と同じ青い文字色で「応援ありがとう、頑張ります！」と記した

兵庫県　向かいの小学校の窓にメッセージが

４月中旬、神戸赤十字病院では多くの医療資材が不足し、感染防止のための防護エプロンを医師・看護師・事務職員が業務の合間をぬって作製する危機的な状況が起きていました。この日、消化器内科の岸本弘基医師や研修医の根来和輝さんらが、エプロン作製のために病院２階の会議室に集まって作業をはじめると、窓から見える「なぎさ小学校」に昨日までなかったものが掲げられていることに気がつきました。

「いつもありがとうございます　みんなで応援しています!!」

校舎の窓に貼られた青色の文字。思わず作業を止めて、会議室の窓の前で立ち尽くした職員たち。 岸本医師はこの時のことを「体の奥が震え、頑張ろう、と熱い気持ちが湧いてきました」と振り返りました。その後、危機を脱した同院では、岸本医師と根来医師の発案で感謝の横断幕が作製され、なぎさ小学校から見えるように病院の外に掲げられています。

神奈川県　レインコートと一緒に届いた激励の手紙

日赤神奈川県支部では感染防止用としてエプロン作製やレインコートの寄付を県内赤十字奉仕団などの協力者に呼び掛けました。その結果、集まったのは約６万５千着のビニールエプロンと約９千着のレインコート、そして、医療従事者への激励の手紙。この他にも県内の日赤各病院には一般の方から数多くの手紙が届き、医療従事者を励ましています。

温かい応援メッセージが心に染み、支えられました。（横浜市立みなと赤十字病院職員）

全国　JAL空飛ぶ合唱団から「何度でも」動画メッセージ

日本航空のパイロット有志によるコーラスグループ「JAL 空飛ぶ合唱団」は、日赤が呼びかけている医療従事者応援プロジェクト「最前線にエールを何度でも」に賛同し、動画でエールを送ります。メンバー各自が DREAMS COME TRUE のヒット曲「何度でも」を歌う様子を撮影し、医療物資を運ぶ機体の映像も加えて編集した動画が公開されています。

美しいハーモニーを奏でる JAL 空飛ぶ合唱団。右の２次元バーコードから動画をご覧いただけます

医療従事者を支援するSNSプロジェクト「#最前線にエールを何度でも」

医療ドラマの主題歌にもなったDREAMS COME TRUE「何度でも」。何度くじけそうになっても立ち上がる、その歌詞の内容に励まされた医療従事者も多いことから、UNIVERSAL MUSICの協力のもと、一般の人々が医療従事者へエールを送る曲として使用許可をいただきました。右の２次元バーコードからスペシャルサイトをご覧ください。

こちら ➡

福島県　地元の小学校6年生から「感謝の贈り物」

新型コロナウイルスに立ち向かう福島赤十字病院の医療従事者に向けて、感謝の気持ちを伝えようと、福島市立福島第三小学校の６年生から感謝の気持ちを込めた寄せ書きと動画が贈られ、同院を代表して渡部洋一院長と會澤英子看護部長が受け取りました。

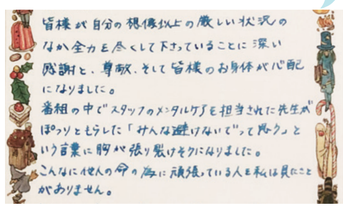
届けられた小学生60人の寄せ書き

職員は精神的・肉体的なストレスがありながらも頑張ってきました。 第三小学校の児童の皆さまから勇気と元気をいただきました。（渡部院長）

東京都　予測がつかない緊張の毎日、応援が励みに

医療従事者への応援プロジェクト「#最前線にエールを何度でも」の応援メッセージや院に届く手紙に日赤医療センターの職員も勇気づけられています。これらの手紙は同院のホームページで詳しく紹介しています。ぜひご覧ください。

私たちは、たくさんの応援に支えられています。たくさんの「ありがとう」にありがとう！（日赤医療センター職員一同）


皆様が自分の現像以上の厳しい状況のなか全力を尽くして下さっていることに深い感謝と、尊敬、そして皆様のお身体が心配になりました。
番組の中で"スタッフのメンタルケア"を担当された先生が ぽつりともらした「みんな逃げないで"って思う」という言葉に胸が張り裂けそうになりました。
こんなに他人の命の為に頑張っている人を私は見たことがありません。

毎日届く温かいメッセージ

わたしも赤十字　今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

寄付での支援者

櫻井裕之（さくらい・ひろゆき）さん

東京都武蔵野市／49歳／不動産管理会社経営

人を救う可能性が広がるから、支援を続けています

日赤のことをちゃんと認識したのは 2011 年の東日本大震災以降です。震災当時、宮城や福島のボランティアセンターに仲間と行って片付けの手伝いをしましたが、何もスキルがないためそれ以上のことはできませんでした。その経験から、何か他にできることはないかと探して赤十字の救護ボランティアに行き着きました。そのボランティアを始めてから救急法などの技術習得の必要性を感じ、東京都支部で講習に通いはじめたのが 2014 年。そこで初めて、救急法の講習といった赤十字の活動は、みんなの寄付で回っていることを知りました。それまでも毎年５月に数千円ほど寄付していたのですが、知ってからは年末にも、臨時収入で得たお小遣いを寄付し、さらに毎月２回の成分献血も続けています。

今は新型コロナで、健康な人であっても被災したような意識になっていると思います。備えの大切さをリアルに実感できるかと。救急法は、災害の備えと同じです。急に目の前で倒れた人を助けるには、日頃から知識や技術を身につけておくことが大切。小学生などに救急法の指導をするとき「だれか一人でも命を救うことができたら、豊かな人生になると思わない？」と話します。そんな話をすると、子どもでも目を輝かせます。人を救えるって、素晴らしいですよね。いろんな方法で人を救うことに関われると思いますが、私は背伸びをしないで、日赤への支援を続けていきたいと思っています。

寄付するあなたも赤十字です

日本赤十字社へのご寄付の方法

クレジットカードで寄付

Web サイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付

■郵便局・銀行の口座振替
■郵便局・銀行の窓口
■お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→

日本赤十字社　寄付　検索

donate.jrc.or.jp/lp/

3.11 あれから10年を生きて　第４回

東日本大震災の発生から2021年3月で10年。
来年の3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

七夕の約束　～夢を失くした子どもたちに

福島県いわき市立 久之浜第一小学校 元校長
赤十字賛助奉仕団員／青少年赤十字指導者指導員　松本光司（まつもとこうじ）さん

あの原発事故からもうすぐ10年。福島には避難してから一度も自宅に戻れないまま大人になった子がたくさんいます。３月11日の朝に家を出た時には、ベッドの上に読みかけの本や、戸棚の中におやつがあったかもしれない。でも、それらを失ったまま、時間だけが過ぎてしまった…。

2011年３月12日、いわき市は久之浜地区住民に自主避難を要請。緊急輸送バスを運行させて避難移動を開始しました。11日に津波の被害があったため市の避難所にいた久之浜第一小の子どもたちは、そこから８つの避難先に分散。そして４月、避難先の小学校で間借りをして第一小の新学期が始まりました。

新しい環境で、子どもたちに異変が起きました。体調不良で保健室に行く子どもが多く、他にもストレス症状を見せる子が日に日に増えました。その様子を見て、僕は決意したんです。子どもたちと一緒に、久之浜第一小に戻ろう、と。

その日から、除染作業のために久之浜第一小に通う生活が始まります。毎日毎日、放射性物質が降り積もった校庭の表土を除去し、校舎中の埃（ほこり）を取り、隅々まで清掃して学校周辺の針葉樹の枝葉もすべて伐採しました。保護者や地域の人も協力してくれて、やがて他の都道府県からもたくさんのボランティアさんが参加してくれました。僕は、日々下がっていく線量を全保護者あてにメールし、第一小から離れて避難している子どもたちに手紙も書きました。今日の久之浜第一小はこんな感じだったよ、また学校で会おうね、と。そして小学校が再開した 2011年10月。232人の在校予定数のうち、戻ってきてくれたのは 191人！ 泣けるのは、親を説得してくれた子がたくさんいたこと。兄弟げんかしないから、宿題ちゃんとやるから、第一小学校に戻らせてください、って。登校初日、僕は朝の校門で子どもたち全員をハイタッチしながら出迎えました。目を真っ赤にさせながら…。

学校を再開させることばかりに気をとられ、子どもたちの大事な心の変化に気づけなかったのかもしれません。学校再開の翌年、体育館に飾られた七夕の願い事を目にして、僕は言葉を失いました。

「お父さん、お母さんがケンカしないで、楽しく生活できますように」

そこにあったのは、生活の不安やストレスから言い争いが多くなった家族の姿に胸を痛めた子たちの、切実な願い事ばかり。

子どもの夢って、もっと自由でキラキラしたものだったはず。有名なスポーツ選手になりたいとか、アイドルになりたいとか…。短冊に生活の悩みを書くのは、子どもたちが夢を見られなくなっているから。

放置してはいけない、本気で取り組まないといけない課題を見つけました。それは福島の子たちが夢や希望を持てるようになること。

あれから８年。昨年、僕は小学校校長を定年退職しましたが、青少年赤十字やNPO活動、公民館長として子どもと関わる仕事を続けています。

学校再開後、遠方からバスで登校した生徒とハイタッチする松本さん

令和2年7月1日（毎月1日発行） 第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）
第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 令和2年7月1日（毎月1日発行）

AREA NEWS

全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は
行われています。

京都府 奉仕団が地域のチカラに！コロナ対策の冊子とともに笑顔で声掛け

日赤京都府支部では、奉仕団による新型コロナウイルス対策の活動が広がっています。南区赤十字奉仕団をはじめとする各奉仕団は、日赤が作った一般向けガイドブック約1万6000冊を地域の人々と協力して配布。ガイドブックを渡す際には“３密”に配慮しながらも、地域の人たちに声をかけて励まし合うなど“笑顔”のコミュニケーションを実践しました。

奉仕団と言葉を交わした方からは「ほっとした」と安どの声も

徳島県 マクドナルドで献血を！テイクアウト利用の客に新しいアプローチ

5月14日、徳島県赤十字血液センターは新型コロナウイルスの影響で店内飲食を中止したマクドナルド徳島阿南店で献血を実施、店内で献血受付を行いました。この新たな試みは献血不足を知った同社からの申し入れで実現したもの。献血者からは「買い物ついでに寄ることができて便利だった。身近に献血バスが来てくれるのはうれしい」といった声が聞かれました。

客席で受付をした後、敷地内に停車している献血バスへ

山口県 部活動休止の運動部員が「自分たちにできることを」高校生たちの献血申し入れ

5月11日から12日にかけて、山口県赤十字血液センターが防府市の高川学園高校に献血バスを派遣しました。同校では新型コロナウイルス感染症の影響により4月16日から休校となっており、運動部のリーダーたちが「自分たちに何かできることはないか」と話し合って献血協力を発案。同校の寮で暮らすおよそ120人の仲間にも参加を呼びかけました。

生徒たちは“密”を避ける配慮をしながら献血に協力

岡山県 ウイルスをブロック！バレーボール選手の協力で正しい手洗い動画などを制作

日赤岡山県支部は、女子バレーボールのVリーグで活躍する岡山シーガルズとRSK山陽放送の協力を得て、感染症対策をまとめた動画を制作しました。岡山シーガルズの選手と日赤のキャラクター・ハートラちゃんが「手洗い（監修・岡山赤十字病院感染管理室）」「うがい・マスク着用」の正しい方法を伝える内容で岡山県支部ホームページ、YouTubeで視聴可能です。

動画には、日本語と英語のテロップを併記する工夫も

理事会開催報告

令和２年度第１回理事会に下記の事項を付議いたしました。新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、文書審議をもって開催に代え、その結果は下記のとおりです。

記

１　予算の補正について（一般会計歳入歳出予算）
　審議の結果、予算の補正については原案のとおり議決されました。

第96回代議員会開催公告

令和２年６月26日に新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」において開催予定だった第96回代議員会は新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、開催中止となりました。そのため文書審議をもってこれに代え、下記の事項を付議いたします。

令和２年７月１日

記

第１号議案　役員の選出について
第２号議案　令和元年度事業報告及び収支決算の承認について

全国 日赤の啓発教材「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！」教育現場での活用が、さらに広がっています

先月号でも取り上げたこの教材は、新型コロナウイルスの感染を防ぐ方法だけではなく、感染した人や感染リスクのある人への差別や偏見についても考える内容となっており、全国の教育現場での活用がますます広がりを見せています。

石川県の青少年赤十字加盟校・白山市立松任中学校では全校生徒797人を対象とする道徳授業で活用。「本当に怖いものは何か？ 自分たちに工夫できることは？」といった真剣な話し合いが行われました。また愛知県でも、複数の学校でこの教材を使った授業が行われ、生徒からは「これからは感染した人の気持ちも考えたい」などの感想が聞かれました。一方、宮崎県支部では同教材を用いた日赤初のオンライン講座を開催。県内複数の高校から30人がリモートで講座に参加したほか、全国のJRC関係者もオンラインで視聴。高校生からは「今後のJRC活動では、世の中の不安や恐怖をなくすための情報発信をしていきたい」などの声が上がりました。なお、このオンライン講座の取り組みは、テレビ局2社、FMラジオ1社、新聞3社ほかYahoo!ニュースなどでも紹介されました。

この啓発教材は石川・新潟・長野県支部が動画を作成し、支部のホームページでも視聴可能です。

岡崎市立下山小学校での授業。小中学校の幅広い学年で教材を活用

生徒からは「不確かな情報が差別につながる」との声も

県内各地のJRCメンバーおよび全国の関係者が講座に参加

熊本県 コロナ対応の避難所とは？梅雨入りを控えて訓練に参加

熊本赤十字病院の看護師らが5月24日、益城町総合体育館で新型コロナウイルスの感染拡大に備えた避難所の運営訓練に参加しました。大雨警報が発令されたという想定のもと、町職員ら約100人が正しい感染防護策や避難者を受け入れる際の手順などを確認。訓練に参加した看護師も、車中泊をしている人の出入りにも目を向けるなど、細部を入念にチェックしました。

間隔を空けるため収容人数が半減するなど、多くの課題が見えた

福岡県 休めない医療従事者のために福岡県支部が預かります！臨時学童「ハートラ・ルーム」

5月7日～27日、日赤福岡県支部が学童支援「ハートラ・ルーム」を開設しました。緊急事態宣言によって小学校が休校となる中、支部に隣接する福岡赤十字病院の職員の子どもたちを預かり、医療従事者を支援するのが目的です。この学童保育では元・小学校校長の職員が中心となり、通常の学習のほか「非常食づくり」など日赤ならではのレクレーションも盛り込みました。

非常食づくりなど、災害時に役立つ「赤十字タイム」も体験した

全国 幸せを願う気持ちを込めて…今年も届いた清々（すがすが）しい香り65回目のスズランの贈り物

ANAグループから全国51カ所の赤十字病院と関連施設へ、スズランの花とオリジナルのしおりが贈られました。1956年にスタートし、毎年恒例となっているこの取り組みは今年で65回目。コロナ禍が続く中、贈呈式は行われませんでしたが、「しあわせ」の花言葉を持つスズランとともに、幸せを願うメッセージが全国各地の患者のみなさんへ届けられました。

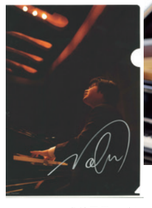
北海道で咲いたスズランを各地に空輸（写真：鳥取赤十字病院）

「赤十字を応援！」プレゼントⒶ 辻井伸行さん ピアニスト

サイン入りクリアファイルとCD

3名さまに

ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール優勝10周年記念アルバム（CD2枚組）



クリアファイル

辻井伸行さんのメッセージ動画（YouTube）はこちら

新型コロナウイルス感染症の終息を願って

今回、国内外での演奏会が延期や中止になり、自分で何ができるかと一生懸命に考えています。自宅で過ごす中、「笑顔で会える日のために」という即興曲を公式YouTubeチャンネルを立ち上げ、公開しました。また、自作曲に加え、これまでCMに出演した際に演奏させていただいた楽曲なども、クラシックを普段聴かれない方にも、僕のピアノがご自宅でひと息ついていただける一助になればという想い（おも）いから演奏しています。新型コロナウイルス感染症の終息を願い、ぼくの大好きなユーミンさんの「春よ、来い」のピアノ演奏も公開しています。動画には、ユーミンさんの素晴らしい歌詞も載せていますので、ぜひ、みなさんも一緒に口ずさんでいただけたらと思っています。

つじい・のぶゆき◎2009年6月に米国テキサス州フォートワースで行われた第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールで日本人として初優勝して以来、国際的に活躍している。

「赤十字を応援！」プレゼントⒷ パートナー企業紹介 vol.4 ライオン株式会社

健康で快適なくらしのために。正しい手洗い習慣の普及啓発活動を継続中

全国各地で展開する「正しい手洗い習慣の普及啓発活動」

ライオン(株)は1891年の創業以来、くらしを支える商品の提供とともに、健康で快適な生活習慣づくりに向けた普及啓発活動や情報提供を推進しています。今回の新型コロナウイルスの感染予防においても、正しい手洗い方法などのくらしに役立つ衛生情報を発信し、改めて手洗いの重要性を啓発しています。正しい手洗い習慣の普及啓発活動は、日頃より若手社員の人事研修にも取り入れられ、創業者ゆかりの地である宮城県石巻市や、事業所のある地域、ハンドソープの生産拠点である香川県坂出市など、全国で社員が主体となって実施しています。

「2016年熊本地震」「2018年西日本豪雨災害」の際にも日赤を通じて義援金の支援を行ったライオン(株)。この度のコロナ禍では、最前線で尽力する医療従事者への支援を目的として、感染症対策を含む日本赤十字社の事業全般の活動資金に対し、寄付が行われました。

今日を愛する。LION

災害時にも使える清潔・健康ケアセット

「災害時のための清潔＆健康ケアBOOK」付き

20名さまに

ハブラシと液体ハミガキ、手指の清掃に使える除菌ウェットシートと冊子「災害時のための清潔＆健康ケアBOOK」のセットです。

※写真はイメージです。

上記プレゼントⒶ希望者は、右記WEBサイトにてご応募ください。

インターネットアクセス

赤十字ニュース　プレゼント　検索

www.jrc.or.jp/publication/news/

ここから応募できます

上記プレゼントⒷ希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。①お名前　②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢　⑤赤十字NEWS７月号を手にされた場所（例／献血ルーム）⑥７月号に関するご意見・ご感想

郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
日本赤十字社 広報室　赤十字 NEWS 7月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785　メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字 NEWS 7月号プレゼント係」）
7月31日(金)必着　※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらからも応募できます

令和2年7月1日（毎月1日発行） 第962号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

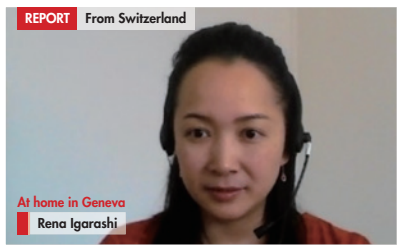
WORLD NEWS

コロナ禍でのアジア支援

避難してきた人々へ手の消毒を促すバングラデシュ赤新月社ボランティア

新型コロナウイルスの感染が広がる バングラデシュを、大型サイクロンが直撃

深刻な難民問題を抱えるアジア地域を新型コロナウイルス感染症が襲いました。さらにサイクロン被害も…。国際赤十字・赤新月社連盟ジュネーブ事務局のアジア担当職員が現地の人道課題についてリポートします。



リポーター：
国際赤十字・
赤新月社連盟
シニアオフィサー
五十嵐玲奈

新型コロナウイルスとサイクロンによる「複合災害」が現実のものに

猛威を振るう新型コロナウイルス（以下、COVID-19）対策に関しては、世界各地の赤十字社・赤新月社がさまざまな支援を続けており、国際赤十字・赤新月社連盟（以下、連盟）には常に最新の情報が集約されています。その事務局があるスイス・ジュネーブでアジア担当のシニアオフィサーとして活動しているのが日赤の五十嵐玲奈。彼女が強く懸念しているのは、災害支援をはじめとする“普段通りの支援”が、新型コロナウイルスの陰に隠れてしまうことです。

「アジア地域ではモンスーン対策が必要な時期に入りました。現地ではCOVID-19への対策を行い、なおかつこれまで通りの支援活動を継続しなければならないため、連盟はサポートを続けています」

５月、スーパーサイクロン「アンファン」がバングラデシュに上陸。COVID-19と自然災害が同時に襲いかかる、という「複合災害」が現実のものとなりました。このサイクロンによって約71万世帯が被災。避難所では“密”状態を避ける必要があるため、前回のサイクロン上陸時の約３倍にあたる１万2000カ所の避難所が用意されました。現地のバングラデシュ赤新月社（以下、バ赤）は７万人のボランティアを動員して、住民の早期避難誘導にあたりました。

避難民キャンプでも感染者を確認 コロナ禍による難民・避難民支援への影響は…

もうひとつ、五十嵐が危機感を抱いているのはCOVID-19がもたらす難民・避難民支援への影響です。世界最大ともいわれるバングラデシュ南部の避難民キャンプでは86万人が生活しており、６月14日時点で38人のCOVID-19感染者が報告されています。サイクロンによって1300戸以上の家屋が損壊しましたが、日赤の支援するバ赤診療所は活動を継続。計80床の隔離治療施設の建設も急ピッチで進められています。五十嵐は「生活基盤が脆弱（ぜいじゃく）な難民キャンプでの感染対策は大きな困難が伴います。ですが、COVID-19を理由に難民・避難民の受け入れを拒否するという事態は避けなくてはいけません」と、コロナ禍でも変わることのない難民・避難民支援の重要性を訴えました。

バングラデシュでは雨期が始まったばかりです。極めて脆弱な立場に置かれている多くの避難民たちは今後の大雨やサイクロンへの備えに加えて感染症対策という大きな課題に直面しています。

バングラデシュ現地での大雨被害の様子

数字で見えた！ 世界で生かされる皆さまのご支援

世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。

バングラデシュ南部避難民支援において、日赤の支援により診療を受けた患者数

8万8835人

※５月末現在、延べ人数

2020年３月、診療所の前で、日赤職員、診療所のスタッフ、ボランティアと共に

2017年８月以降、武力衝突などを逃れた人々が大量流入したバングラデシュ南部の避難民キャンプでは、現在も86万人が暮らしています。

日赤は2017年８月の初期段階から支援を続け、仮設診療所に代わるプレハブ式の診療所を2019年９月に新設。避難民からは「ジャパンクリニック」の愛称で親しまれています。現地スタッフやボランティアには「自分たちの手でこのコミュニティーを守っていく」という思いも育まれており、新しい診療所はそのシンボルとも呼べる場所です。避難民キャンプでも新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の患者が出ており、医薬品や防護服などの確保がより困難になっていますが、それでも現地の医療スタッフやボランティアの安全を確保しながら、できる限りの診療活動にあたっています。